

一般部門／工芸系

審査評

今回は実物を拝見したのではなく Web 上でしたが、ユニークな応募作品もあって楽しんで審査させていただきました。ただし、それぞれ入選や入賞を果たした作者も含めて、自身の作品をしっかりと観てもらうために、たとえばバック紙と三脚と照明を揃えるなど、作品画像の撮影にもう少し気を遣ってほしいというのが第一印象でした。今後の制作については自分が好きな工芸分野の展覧会などをさらに観て、より意欲的で深まりのある取り組みを切に希望します。また、今回はオブジェの応募作がほとんどありませんでしたが、素材の物質性をかたちとして表現するなどの実験的な作品の出品も大いに期待します。

(岐阜県現代陶芸美術館 館長 石崎 泰之)

今回は作品写真による審査でしたので、工芸の特質でもある素材感やスケール感が伝わりにくい面もありましたが、コロナ禍でも展覧会を途絶えさせないという主催者の意欲を感じました。審査はなるべく作品の良い所を評価するように心がけましたが、受賞、入選、選外の結果に関しては必要以上に一喜一憂することはないと思います。工芸のような作者のアイデアと素材、技術とを結び付けて創造的な世界を築くことは時に時間を要します。県民の皆さん、これからも良い作品を目指してお互いに頑張りましょう。

(広島大学大学院人間社会科学研究科 教授 井戸川 豊)